人は場所によって変わるもの

　お家の方とお話をさせてもらう機会が増えてきて、次のような話をよく聞くようになりました。

　「家と学校で、そんなにちがうものなんですね。」

　「そんな姿を見たことが無いので驚きました。」

　私も教師という目線よりも、保護者という目線で我が子たちを見た時に、そのあまりの違いに驚くことが少なくありません。

　それは良い意味でも悪い意味でも、です。

　今回はその「子どもたちの態度の違い」ということについて書いてみます。

　例えば、「人によって態度を変えるんじゃない」という指導があります。

　私は小さい頃に直接指導を受けたこともありますし、間接的に聞いたこともあります。

　どこも間違っていないように聞こえる言葉ですが、よくよく考えてみると不思議な点も浮かんできます。

　たとえば私は、学校で授業をする時は抑揚をつけながらテンポよく話すことが多いです。

　授業の内容によっては、情感をたっぷり込めて話すこともあります。

　それとは別に、講演会のオファーを受けた時はできるだけじっくりと論理的に話そうとします。

　また、家族としゃべっている時はくだけた話し方になりますし、友だちと話す時はフランクな物言いになります。

　さらに、友だちは友だちでも、学生時代からの古い友人だと、また全然違

う話し方になります。
　つまり、「人によって態度がコロコロと変わっている」こととなります。
　では、どれかに統一して態度を変えないようにできるかといえば、それは相当難しいと言わざるを得ません。
　いつも講演会モードで家族と話していたら、恐らく大反対を食らいます。「お父さん、いつもみたいに普通に話して」と間違いなく言われるでしょう。
　逆に、古くからの友人に話すモードで講演をしたとしたら、会場が大騒ぎになるはずです。
　「友達感覚で話すなんて礼儀がなってない」「場に応じた話し方もできないのか」「非常識極まりない」と二度と呼んでもらえなくなるでしょう。
　大人でも子どもでも、「態度は変わる」のが実は常（つね）なのです。
　職場でバリバリと働くビジネスマンが、家に帰れば子煩悩な親バカで、実家に帰れば甘えたがり…なんてことは別に珍しくありません。

　いったい、これはどういうことなのでしょうか。
　たくさんの顔を、器用に演じ分けているということでしょうか。
　「本当の自分」というものがあって、その自分が「講演会用の自分」「授業用の自分」「家用の自分」という感じで使い分けているのでしょうか。
　この問いに、恐らく多くの人は次のように答えるでしょう。

意図的に演じている訳ではなく、自然とそういう風になってしまうんです

　自分という人間は、常に他人との人間関係の中に存在するものです。
　その存在とは、「相手によって引き出されている」ものです。

　例えば、ファンが周りにいることで、初めてアイドルは成り立ちます。
　いくら自分で「アイドルだ」と言っても、ファンがいなければアイドルとはいえません。
　つまり周りのファンたちが、アイドルという立ち位置を作っているのです。
　例えば、学生たちのいる教室に来て教壇に立てば、その人は先生です。
　いくら自分で「先生だ」と言っても、教わる学生がいなければ先生とはいえません。
　授業を受ける学生たちが、先生という存在を規定しているのです。
　お父さんだって、最初からお父さんだったわけではありません。
　我が子が生まれてきてくれたからこそ、初めてお父さんになれたのです。

自分の存在は、いつも相手によって引き出され、作られています。
つまり、人間にはたった一つの「本当の自分」がどこかにあるわけではないということです。
色んな場で使い分けているキャラクターや存在が全て、本当の自分だということです。（これを「分人主義」と言います。平野啓一郎さんの本に詳しいです。）

では、なぜ今も「人によって態度を変えるな」という指導がなされるのか。
それは恐らく、この指導が額面通りの「態度」を指している訳ではないからです。
態度というよりも、人と接する時の基本姿勢や生き方のことを指している言葉なのだと思います。
「どんな人と接する時も、相手へのリスペクトを忘れずに」や、「感情の赴くままに相手を傷つけたり悲しませたりしないように」など、要は「人を大切にしなさい」ということを伝えたいのだと思います。
態度は、その場に応じて変わるのが自然なことです。
話し方だって変わるし、服装だって変わります。

でも、「人を大切にする」という内面的な基本スタンスは変えてはいけないのだと思います。
気心が知れている仲だからといって、乱暴な接し方で友だちを傷つける。
匿名だからといって、SNS で感情の赴くままに振舞い、他者を攻撃する。
家族なら分かってくれると過信して感謝もせず、わがままし放題に振舞う。
こういう場合は、「人によって態度を変えるな」と指導するより、そもそもの「人への接し方」や「自分の生き方」を見つめ直すように促すことの方がずっと大切なのだと思います。
生き方が変われば、自ずと「態度」は変わってくると思うからです。

家庭という場所とは違う、学校というもう一つの場所で、子どもたちは既に自分自身の人生を歩み始めています。
そしてその立ち位置や振舞い方は、たくさんの友達との関係の中で作られるものなので、家庭とは違うことがとても多いです。
「家では物凄く腕白なのに、学校では物凄くおとなしい」という場合もありますし、その逆も大いにあり得ます。
「家ではとてもやさしいのに、学校ではとてもわがまま」という場合もありますし、その逆も十分に起こりえます。
この時に、「態度を変えるんじゃないよ」と指導するのも一つなんですが、その根底にある「人への接し方」や「人としての生き方」について言及するのも一つの方法なのかもしれません。
先にも書いた通り、態度は変わるのが自然です。
そして、どんな場においても通底する大切な事を伝え続けるのが教育においては非常に大切なことなのだと思います。
家庭とは全く違った顔を多く見せるお子さんたちが集う学校という場所での姿について、またこの場を通じて少しずつお伝えしていきたいと思います。
（文責：渡辺道治）

１学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ (google.com)